

描画による知的障がいのある児童生徒の理解と 特別支援教育での実践的研究

Keyword：描画、特別支援教育、知的障害、個別最適化された学び、

研究目的

アセスメントとして定期的に絵を描く機会を設けて、その結果を分析することにより、児童生徒が伝えたい気持ちや言葉にならない気持ち、児童生徒自身も気づいていない潜在的な気持ちに教師が気づき、特に発達の偏りが大きい児童生徒の実態把握ツールの一つとして活用し、児童生徒一人ひとりの現状に適した支援方法や指導方針を検討すること。

研究方法

- (1) 実施日
令和2年度6月・9月
- (2) 対象
本校中学部生徒 18名（1年生6名・2年生6名・3年生6名）
- (3) 研究方法
児童生徒が描いた「木」をバウムテストの理論に基づいて分析。
その結果を基に、児童生徒に適した支援方法や指導方針を検討。



結果

表1 木を描いた位置(6月実施)

画面左上 1年 (A · O · TA · TE · KS · KY)	画面中央上 3年 (T)	画面右上
画面左下 2年 (MA) 3年 (Y)	画面中央 2年 (H · MU) 3年 (K · N)	画面右下
	画面中央下 2年 (K · T) 3年 (O)	

表3 木に見えない木を描いた生徒の分布

描画年度	令和2年度（6月・9月）			令和元年度	
	1年生	2年生	3年生	2年生	3年生
人数	3名・2名	4名・5名	3名・3名	2名	3名

表4 枝を描いた児童生徒の分布

描画年度 学年	令和2年度（6月・9月）			令和元年度		
	1年生	2年生	3年生	2年生	3年生	小学生 （1～3年生）
人数	1名・1名	0名・0名	2名・1名	1名	1名	5名 （13名中）

表2 木を描いた位置 (9月実施)

画面左上 2年 (K)	画面中央上 3年 (N・T)	画面右上
画面左下	画面中央 1年 (A・O・TA) 2年 (MA・MU・H・T) 3年 (OK・T・Y)	画面右下
	画面中央下	



図1 画面左上の絵



図2 画面中央の絵



図3 画面中央上の絵

表5 個に適した支援・指導

グループング	対象生徒	支援や指導を行う教師の姿勢
木を描いていない	5名	寄り添って、関りを多くする 一緒に楽しむ
木に見えない木を描く	13名	クラスにいたら面白い子と捉える 自信をつけることができるような関りをする 理解しようと努める
形を成していない絵	2名	毎日、笑顔で元気に過ごすことができればOKと捉える
木以外のものを描く	4名	心と体を整理する関りをする 落ち着くような支援を考える
実が描かれている	3名	何事も自分でやってみることができるように、チャレンジ できる機会をつくる
幹が長方形	1名	段階的に行動範囲を広げて、学ぶ機会をつくる
緑色と茶色のみで木を描く	6名	自己選択の機会をつくって、自信をつける関りをする 自分を知ることができる機会をつくる
木が白抜き	2名	色々なことを教えたい
極端に小さい木	3名	じっくりと関わる
筆圧が高い	14名	がんばっている そのままでいい
画面に字を書いている	6名	生徒の世界を尊重する



図10 木に見える木①



図 11 木に見える木②



図7 木に見えない木①



図8 木に見えない木②



図9 木に見えない木③

考察・展望

1点目として、アセスメントとして描画を用いることで、教師による児童生徒のアセスメントが可視化され、日々の教育活動を通した教師の実態把握と観察力の意義を再認識できた。今回、バウムテストの分析方法をもとに解釈を行うと、目新しいことが描画の分析でわかるわけではなかったことから、アセスメントツールの活用は、生徒の実態把握の取っ掛かりであって、日頃の教師の観察力、情報収集力が生徒理解に欠かせないものであることが理解できる。

2点目として、教師が児童生徒の支援の在り方について新たな気づきを得ることができた。学校生活は、生徒と教師との共同生活の場でもあり、一緒にいるからこそ気づかない、または、忘れてしまう生徒のよさや困難さがある。それが描画に表れているケースがあった。児童生徒の支援の原点に立ち返る方法には、視覚的に理解しやすい描画を用いたアセスメント技法が適しているのではないかと思える。

3点目として、今回の実践で教師間のコミュニケーションを活性化できた。その理由として、対面で話をするよりも、描画という同じ対象に向かって話す方が心理的負担を感じないことや、様々なアセスメントツールがある中で、描画は数値や文字がないからこそ自由に発言しやすいことが推測される。生徒一人ひとりのニーズに適した支援及び指導を行うために、描画を媒介にして、教師同士が効果的な情報共有や意見交換を行う場を設定することは有効であるという結果が得られた。

本実践を通して、描画でのアセスメントによって学校生活の中では気付きにくい児童生徒のよさや困難性に気づくことができ、その実態を基に、児童生徒に適した支援方法や指導方針を検討することができた。今後の課題としては、描画のアセスメントを活用した児童生徒の内面的な成長を促す教育活動の検討である。